

タイトル	ふれあいサロン間の連携の促進に向けた取り組みの現状と課題
著者	菅原, 浩信; Sugawara, Hironobu
引用	北海学園大学経営論集, 23(4): 45-56
発行日	2026-03-25

ふれあいサロン間の連携の促進に向けた 取り組みの現状と課題

菅 原 浩 信

1. はじめに

1.1. 問題意識

ふれあいサロン¹⁾は、参加者にとっての外
出機会や安否確認の場、スタッフにとっての
社会参加や生きがいの場、民生委員や町内会
役員にとっての高齢者の見守りや問題発見の
場である他、参加者やスタッフを含む地域住
民同士の出会い・集いや交流・ふれあいの場
でもあり、地域コミュニティにおいて重要な
役割を担っている。そのため、ふれあいサロ
ンは、その主たる参加者である高齢者をはじ
め、多くの地域住民に必要とされており、地
域コミュニティの活性化という観点からも、
その存続が望まれている。

しかし、多くのふれあいサロンは、様々な
問題点・課題を抱えており、中にはその存続
が危ぶまれているものもみられている。ふれ
あいサロンに関する先行研究で指摘されてい
る問題点・課題は、以下の3点に大別できる²⁾。

- (1)プログラムに関するもの(例えば、「嗜好
性の異なる参加者がともに参加できるプ
ログラムを準備・企画することが難しく、
マンネリ化しやすい」(高野他(2007),
p.132),「プログラムの種類が乏しい」
(松浦・浦山(2010), p.528),「世代間交
流ができていない」(三宅・井関(2014),
p.108)など)。
- (2)スタッフに関するもの(例えば、「担い手
も固定しがちで後継者が育ちにくい」

(高野他(2007), p.132),「スタッフの高
齢化」「新規スタッフが入ってこない」
(以上, 松井(2014), p.90),「参加者がお
客さんとなっている場合も多く、『もて
なす』側の担い手に負担がかかる場合が
ある」(坂本(2018), p.38)など)。

- (3)参加者に関するもの(例えば,「男性の参
加者が少ない」(高野他(2007), p.132),
「参加者が限定されている」(松浦・浦山
(2010), p.528),「来てほしい参加者が来
ない」「参加者の固定」(以上, 松井
(2014), p.90)など)。

これらの問題点・課題の多くは、現在にお
いても解決されているとはいえない。そこで、
今後ふれあいサロンには、これらの問題点・
課題を解決することにより、その存続を求め
る地域住民の声に応え、継続的な運営を図っ
ていくことが求められる。

そうした問題点・課題を解決するための方
策の1つとして、ふれあいサロン間の連携が
あげられる。そもそも、単独のふれあいサロ
ンでは、スタッフ、資金、ノウハウなどに限
界があり、できることは限られている。その
ため、ふれあいサロン間で支え合うことによ
り、できることが増えていくはずである。ま
た、高齢者の外出機会の増加、より多くの仲
間づくりの場の確保、送迎に伴うリスクへの
対応などの必要性を考慮すれば、徒歩圏に複
数のふれあいサロンが存在することが望まし
く、そのためには、これら複数のふれあいサ

ロン間の連携を図っていくことが求められる。

ふれあいサロン間の連携によって、以下の3点の効果が期待できる。

- (1)他のふれあいサロンのプログラムのノウハウを共有し、自分たちのふれあいサロンに取り入れることが可能となる。その結果、プログラムの種類の増加やマンネリ化の防止につながるとともに、新たなプログラムが導入されれば、新しい参加者や男性の参加者の増加、来てほしい参加者の参加が期待でき、参加者の固定化や限定化を解消することにもつながる。
- (2)自分たちのふれあいサロンでスタッフが不足する場合、他のふれあいサロンから応援に来てもらうことが可能となる。その結果、自分たちのふれあいサロンのスタッフの負担軽減につながるとともに、「負担がそれほどでもないのなら」ということで、新規スタッフの加入が期待できる。また、そうした新規スタッフが他のふれあいサロンで経験を積むことができれば、自分たちのふれあいサロンにおける既存スタッフの負担軽減や後継者の確保をもたらすことにもつながる。
- (3)参加者間の行き来（他のふれあいサロンにも参加すること）が容易となる。その結果、参加者同士や参加者とスタッフの出会い・集い、交流・ふれあいの機会が増えることによって、参加者の増加が期待でき、参加者の固定化や限定化を解消することにもつながる。

このように、ふれあいサロン間の連携によって、前述の問題点・課題の多くが解決可能となり、ふれあいサロンの継続的な運営につながっていくことが期待できる。そのため、ふれあいサロン間の連携の促進に向けた取り組みが求められる。

1.2. 先行研究

ふれあいサロン間の連携に関連する指摘と

しては、以下の3点があげられる。

まず、山下他（2012）は、F県K町において、町社会福祉協議会が10ヶ所の地区サロンと社協（が運営する）サロンで構成される「ふれあいサロンスタッフ会議」を立ち上げ、情報交換や意見交換を行っていることを明らかにした。

次に、菅原（2017）は、北海道釧路町の5ヶ所のふれあいサロンが抱える問題点・課題を整理するとともに、それらを解決するための方策の1つとして、ふれあいサロン間のネットワーク化をあげ、それに伴い、来場者の増加、プログラムのスムーズな決定、サポーター（スタッフ）の後継者の確保が可能となることを提示した。

そして、中村（2019）は、京都府宇治市のM学区において、複数サロンの利用者により、活動状況やそこでの話題が近隣サロンと情報共有され、サロン同士がゆるやかにつながるとともに、サロン代表者による連絡会によって、高齢者や地域課題に関する情報を共有し、連携して取り組む体制ができており、サロンを介したコミュニティネットワークが形成されていることを明らかにした。

しかし、これらの指摘では、ふれあいサロン間の連携についての言及にとどまっており、管見の限り、ふれあいサロン間の連携の促進に向けた取り組みについての指摘はみられない³⁾。

1.3. 研究目的

近年、主としてふれあいサロンの代表者やスタッフから、「他のふれあいサロンではどうしているのか知りたい」といった、ふれあいサロン間での情報交換やつながりを求める動きがみられており、ふれあいサロン間の連携の素地がつけられつつあるといえよう。それに伴い、今後、ふれあいサロン間の連携の促進が求められる。

そこで、本稿では、ふれあいサロン間の連

携の促進に向けた取り組みに着目し、その現状と課題について明らかにすることを目的とする。

1.4. 研究方法

本稿では、ふれあいサロン間の連携の促進に向けた取り組みのうち、ふれあいサロンの設立・運営の支援に取り組んでいる社会福祉協議会が主体となって、ふれあいサロンの代表者やスタッフを対象に開催されている交流会、研修会、情報交換会など（名称は様々であるが、以下、交流会に統一する）を取り上げるものとする。

（福）北海道社会福祉協議会および（福）札幌市社会福祉協議会の協力を得て、前述の交流会を開催している北海道内の8ヶ所の市区町村社会福祉協議会（以下、A社協～H社協と表記する）に対してインタビュー調査を実施し（2024年9月～11月）、その結果から、当該交流会の背景・経緯、内容、効果、問題点・課題の抽出と整理を試みる。

2. 事例

これら8ヶ所の社会福祉協議会が開催している交流会における背景・経緯（当該地域におけるふれあいサロンの状況を含む）、内容、効果、問題点・課題については、表1-1～1-4に示す通りである。

3. 分析

3.1. 背景・経緯

交流会が開催される背景・経緯としては、例えば、サロンが増えたことに伴う「サロン間の情報交換、情報共有の必要性」（D社協）、「サロン間のつながりを求める声」（F社協）がある。そして、交流会は「それぞれのサロンの状況を知る機会」（G社協）として、「サロンの取り組みを共有し、それを持ち帰って自分

のサロンに活かしてもらおう」（D社協）、「サロンに持ち帰れる」内容にする（F社協）ということを目的に行われている。

3.2. 内容

交流会の内容は、主として、以下の3点から構成されている。

- (1)グループワーク（例えば、①「サロンの活動紹介」（B社協）、「お互いの活動発表」（E社協）、②「活動歴の長いサロンから秘訣を披露してもらおう」（F社協）、③「サロンでの困りごとを発表」（B社協）、「来てほしい人が来てくれないこと」を話題に（G社協）、「悩み相談・質問タイム」（H社協）など）。
- (2)講演（例えば、「その時の旬なテーマの講演」（A社協）、「防犯関係の講話」（E社協）など）。
- (3)ふれあいサロンでやれそうなプログラムの紹介（例えば、「体操」（B社協）、「ゲーム（ポッチャなど）」（D社協）、「新しいレクリエーション」「出前講座」（以上、F社協）など）。

3.3. 効果

交流会の効果としては、以下の5点があげられる。

- (1)プログラムの共有（例えば、「交流会で紹介されたモルックをやってみたいというサロンが出てきて、社協が仲介し、やり方を教わり、モルックを購入し、サロンでやっている」（C社協）、「交流会で聞いたプログラムをやっているふしはある」（D社協）など）。
- (2)出席者同士が知り合いになる機会（例えば、「他のサロンとの交流ができた」（B社協）、「グループワークで同じグループになった人同士で連絡先を交換していることがある」「出席者間のつながり（知り合い）ができているともいえるのでは」（以

表 1-1 交流会の現状と課題(1)

	A社協	B社協
背景・経緯	<ul style="list-style-type: none"> ・地域内には50ヶ所くらいのサロンがある（古いところでは1990年開設） ・コロナ禍でサロンの新設が止まっていたが、2023年、2024年に1ヶ所ずつ新設 ・A社協の職員がサロンをまわることは難しいので、サロンの現状は助成金の報告（半年に1度）や必要に応じて電話で知る程度 ・生活支援コーディネーター（職員のうち2人）がサロンに訪問をしている ・広報活動（A社協）としては、年1回マップを更新し、広報誌に掲載している程度 ・年1回、公共施設でパネル展を実施（地区ごとにサロンを選び、その活動内容を写真などで説明） 	<ul style="list-style-type: none"> ・地域が広いこともあり、地区別の活動が多く、例えばI地区では6つの子育てサロンがブースを出してイベントを開催し、J地区では4つのサロンがそれぞれの活動（ストレッチ、折り紙、民謡、踊り）を披露するイベントを開催 ・J地区のイベントをきっかけに、他のサロンに行ってみようという人が出てきて、参加者の増加（サロンの掛け持ちではあるが）につながっている ・地区別の活動（上記のI地区、J地区）は、地区社会福祉協議会（地域住民主体で運営する組織、B社協とは独立した組織）の主催 ・子育てサロンも高齢者サロンも参加者の減少という問題を抱えており、お試しで合体するものもありか ・クチコミ（信頼できる人（例えば民生委員など）からの）で他のサロンを知り、参加するケースがあり、サロンの掛け持ちが多い印象 ・ホームページ上でサロンを訪問した時の内容をupしている
内容	<ul style="list-style-type: none"> ・年1回、交流会を実施 ・3分の1から半数のサロンが出席、代表者（リーダー）中心に30人くらいが参加 ・来てくれるということは、交流とか新しい情報を求めているのでは、と考えられる ・その時の旬なテーマの講演と、グループワーク（規模別でグループ分け） ・2024年は11月～12月に予定、グループワークは課題ごと（人が足りない、マンネリ化など）にグループを分けてみる予定（同じ課題であれば、意見を出しやすい、つながりやすいかもしれない） 	<ul style="list-style-type: none"> ・コロナ禍以前より交流会を開催、レクリエーションの紹介など ・2022年度は講話だったが、出席者から他のサロンの人と話す機会がほしいという声があり、2023年度は体操の紹介とグループワークを実施 ・この体操は、高等支援学校の生徒が考案したもので、サロンで参加者と生徒が一緒に行ったことがある⇒元気をもらえた、自分たちのサロンでもやってみたくて好評 ・グループワークは、活動内容でグループ分けを行い、同じ地区あるいは近隣の地区で活動内容が同じであれば同じグループにした ・2023年度は20人ちょっとの参加にとどまる（運営代表者+1人まで） ・2024年度は開催せず、地域内の10地区を3人のB社協職員で分担してサロン訪問に替える予定
効果	<ul style="list-style-type: none"> ・出席者の反応としては「あそこでああいうことをやっているんだね」という認識にとどまっている印象（年1回だからなのか） ・現状では、サロン間で関係があるというのはあまり聞かれない 	<ul style="list-style-type: none"> ・茶話会のサロンと体操のサロンが交流会で同じグループになり、茶話会のサロンから体操のサロンの話を聞いて講師に来てもらえないかということになったようである ・グループワークでは、他のサロンとの交流ができた、課題に対してどうやっているのか聞いてよかったという声があった
問題点・課題	<ul style="list-style-type: none"> ・リーダーは民生委員や町内会役員などを兼務していることが多く、そこで知り合いになる（サロンのリーダー同士ということでは知り合いになっていないようだ） ・他のサロンと交流したい、他のサロンはどうしているのを知りたい、他のサロンを見に行きたいというようなニーズがサロン側にはあまりないのではないか ・もともと仲良しでサロンを始めたところ、つながりのある人同士でサロンを始めたところが多いこともあり、サロン間のつながりを求めているわけではないという面もある ・相互訪問（課題に対してうまく対応しているサロンの見学をきっかけとして）は受け付けてもらえないわけではないと思う ・子ども食堂の場合、既存の子ども食堂で修業してから新規にオープンするケースが多い（習得すべきスキルが多い）ので、横のつながりがつくりやすいのではないかとサロンの子ども食堂に比べて必要なスキルが多いわけではないので、修業する必要がないのかもしれない 	<ul style="list-style-type: none"> ・（前述の）講師に来てもらえないかという話のその後は不明 ・地域内には80～90ヶ所のサロンがあるが、交流会にはその会場近くの人しか来られない ・グループワークは、サロンの活動紹介とサロンでの困りごとを発表してもらった予定であったが、活動紹介で終わった（話しすぎて）グループも ・出席者はもともと知り合いであるケースが多いことから、サロン間の交流には発展しなかった ・高齢化に伴う体力的な負担などから、今後サロン間の交流をしようとは思わないのではないかと ・町内会主催のサロンは、参加者を町内に限定している（アパート単位で限定しているところも）ので、参加者の広がりがみられないし、サロン間の連携という話にはなりにくい ・慣れたメンバーだけでよいというサロンもあるので、サロン間の連携というニーズはサロン側にはない（一緒に何かやりたいという声は上がっていない） ・自分たちのサロンを維持していくだけで精一杯⇒B社協としても、まずは参加者をどう集めるかが優先

出所：各社会福祉協議会へのインタビュー調査結果に基づき筆者作成。

ふれあいサロン間の連携の促進に向けた取り組みの現状と課題(菅原)

表 1-2 交流会の現状と課題(2)

	C社協	D社協
背景・経緯	<ul style="list-style-type: none"> ・地域内のサロンは 50 を超えていたが、代替わりがうまくいかない、コロナ禍の影響などで減少傾向にある ・マンション内のサロンを増やしていきたい ・地域内には 16 地区があるが、その中のK地区では、町内会単位でサロンが開催されており、よそで何をやっているのか知りたいという声がある ・やってみたいけれども場所がないので、なかなか新規のサロンが立ち上がらない ・サロン間での協力がみられる（助成金申請の書類の書き方のアドバイス、他のサロンの活動内容の情報提供（クチャコミ）など） ・サロンがC社協を通さず直接外部組織（警察、行政）とつながるケースも（いったん仲介したら（道筋をつけたら）あとは直接サロンでということ） ・サロン訪問の結果を、広報誌で年3回紹介している ・サロンをやりたいという人に他のサロンを見学してもらおうことをおすすめしているが、実績はゼロ ・コロナ禍以前に、C社協で「サロン参観日」（サロンの見学）という試みをしたが、希望者ゼロということで、その年限り ・他のサロンでやっていることを、C社協が情報提供し、見学しただけでアレンジするとしているが、実績ゼロ ・参加者が他のサロンにも参加することはあるのではないかと（ただし、町内会のサロンは町内会限定なので難しい） 	<ul style="list-style-type: none"> ・2014 年よりサロン事業がスタート、年度内に6つのサロンが開設 ・2015 年にさらに2つサロンが増えたことから、サロン間の情報交換、情報共有の必要性が高まり、交流会を開催（現在、町内にはサロンが 11（うち休止1）） ・交流会とは別に、2014～2016 年にサロン関係者の情報交換の場を設置⇒2017 年以降は交流会に一本化 ・各サロンのスタッフは代表者+2～3人であるところがほとんど⇒代表者にどうしても負担がかかるが、「大変だけど、やらなければならない」で話が終わっている
内容	<ul style="list-style-type: none"> ・交流会は、2023 年度までは 10 名くらいの出席であったが、2024 年度は 26 名と出席者が大幅に増加 ・子育てサロンも交流会の対象⇒プログラムに反映（子育てサロンにも関連する内容とした） 	<ul style="list-style-type: none"> ・交流会は、2015 年以降、2017 年、2019 年、2020 年、2022 年、2023 年と開催 ・年1回（年度末、2月頃）に開催、サロンの取り組みを共有し、それを持ち帰って自分のサロンに活かしてもらうことが目的 ・2023 年の交流会は、情報交換の他、D社協で行っている介護予防サービスの内容や、ゲーム（ポッチャなど）・助成金の情報提供などを行った ・出席者はサロンの代表者+α 複数人数が出席するサロンも ・情報交換では、特にしぼりを設けることなく、自由に話し合ってもらっている ・情報交換では、①費用の問題（取支がカツカツ）、②場所の問題（町内会館が狭く、ゲーム（モルックなど）をやるのが難しいなど）、③昼食の問題（提供しているサロンは半分くらい、お金がかかる）、④会場への移動の問題などが話題になっていた
効果	<ul style="list-style-type: none"> ・サロンを続けていくことが難しいと考えていた参加者が、他のサロンではいろいろと活動してがんばっていることを知り、もう少しサロンを続けてみようという気になった、というのが成果の1つ ・交流会をきっかけに、交流会で紹介されたモルックをやってみようというサロンが出てきて、C社協が仲介し、やり方を教わり、モルックを購入し、サロンでやっているケースも ・また、包括支援センターの話を聞きたいというサロンからの声があり、C社協がつかないというケースもある 	<ul style="list-style-type: none"> ・交流会で聞いたプログラムをやっているふしはある ・2022 年は、各サロンでやっているゲームの種類をホワイトボードに書き出し、共有を図った⇒「やったことない」「どういうルール？」などと聞き出すケースが目立った ・情報交換で出された課題に対して、「うちのサロンではこうしている」という話題提供もなされた
問題点・課題	<ul style="list-style-type: none"> ・C社協としては、サロンの訪問を通じて、サロンの課題を把握するとともに、うまくいっている取り組みを共有し、情報提供していくことを心がけている（訪問によって知り合いになると相談しやすいのだが） ・子ども食堂だと横のつながりはできやすいが、サロンだとそれぞれのカラーがあるので、横のつながりはつくりにくいのではないかと 	<ul style="list-style-type: none"> ・2022 年は会議形式で実施したが、1人でしゃべる人がいたせいで、「他のサロンのことがもっと聞きたかった」という声が出た（情報交換にならなかった）⇒2023 年は2つのグループに分けてみたが、やはり1人でしゃべる人が出現（D社協職員がファシリテーターとして入ったにもかかわらず） ・(2022 年に行った) 各サロンでやっているゲームの共有を、実際にしているかどうかは不明 ・最近では、陳情のような感じ（例：国は金を出してほしい）になりつつあるのが問題と感じている ・サロンの見学は会場が狭いので少人数でなければ受け入れられない ・当該地域は公共交通機関の利便性がいいわけではなく、徒歩での移動がメイン⇒他のサロンに見学に行くためのハードルが高いようだ ・サロン間の距離が離れていることもあり、近隣のサロンからサポートするという話にはならない ・各サロンにそれぞれ「色」がある⇒合併してまでサロンを継続するということではない ・月1回サロンを開催するのが一杯というところではないか⇒現在のサロン活動を続けていければ満足であり、発展させていこうという余裕がないと思われる ・特に変えようとかは思っていない、続けていければそれでOK、サロンを続けていくことができるから、それで十分⇒新しいことにチャレンジしようということには至らないのではないかと ・年1回情報交換の場（交流会）があり、そこで他のサロンの情報が得られるので、それで十分だし、D社協職員がサロンに訪問したときに「他はどうしている？」と聞き「こうしている」と教えてもらえればそれで十分満たされているのでは ・サロンの中には代表を交代（若い世代に）したところもある⇒危機感がないわけではなく、存続していきたいという意欲はあるのでは

出所：各社会福祉協議会へのインタビュー調査結果に基づき筆者作成。

表 1-3 交流会の現状と課題(3)

	E社協	F社協
背景・経緯	<ul style="list-style-type: none"> ・サロン事業（助成金）は行政からの委託 ・サロンは2011年にモデル事業としてスタート（当初は8団体）⇒現在は41団体（2024年5月末）、数はここ数年横ばい ・高齢化、後継者難（2024年には2つのサロンが活動をやめた） ・地域包括とつながりやすくなるように地区分けをしている⇒保健師が体力測定で訪問するなどつながりができている ・2024年に新規で立ち上がったサロンは、既存のサロンの参加者が、既存のサロンの支援を受けながら、自ら立ち上げたもの ・複数のサロンに参与している人がある（あるサロンの代表が、別のサロンでは事務局というように）⇒サロンの新規立ち上げに協力 ・地域外の人も参加可、自分で来ればOK（送迎はしない）というサロンも ・あらかじめ電話をもらえればサロンの見学をOKにしている（見学）ところも ・お試し体験のようなもの（気に入ったらどうぞというもの）も⇒誰でも参加OK ・おそらくサロン間でのやりとり（サロンの見学くらい）は以前からあったのではないか ・情報交換ができたらいねという声があった 	<ul style="list-style-type: none"> ・サロン事業は2007年度より実施、現在64団体が登録、このところ55～60団体で推移 ・このうち30団体以上が行政の推進する介護予防体操を実施、その他、ふまねっと、食事、麻雀など ・サロン事業の開始時より、旧・交流会を開催（地域全体で） ・コロナ禍で旧・交流会が中止⇒サロン間をつなぐを求める声⇒2020年より新・交流会として再開 ・2023年度に、他自治体のサロンとの交流会を実施、90人くらいが出席⇒他自治体では食事を出すサロンが多く、ポッチャなども行われている⇒刺激になったという声が多い⇒マンネリ化の防止につながっているのでは ・他のサロンのことを知りたいというニーズに対しては、「サロンだより」でサロンを紹介したり、F社協の広報（年4回）でも紹介したりしている ・また、必要に応じてF社協がサロン同士をつなげることも ・複数のサロンを掛け持ちする人がけっこういる（徒歩20～30分圏内に複数の会館があるし、公共施設を利用するサロンが複数ある） ・意図的に介護予防体操を週2回やりたいために、複数のサロンを掛け持ちしているというパターンもある⇒プログラムの重複というのは問題がないようだ ・介護予防体操の指導者が不足している⇒他のサロンにいる指導者が手伝うこともある ・他のサロンのプログラム（脳トレ、指ヨガなど）を見学して、自分たちのサロンでもやってみようということもある
内容	<ul style="list-style-type: none"> ・年1回、サロンの代表者を集めて交流会を実施、コロナ禍で一時中断（2020～2022年度） ・2023年度は、防犯関係の講話の後、お互いの活動発表（自分たちのサロンの魅力）をグループワーク形式で実施 ・グループは活動内容に関係なくランダムに分けた ・2024年度は、個人情報などをどこまで公開するか検討したい⇒連絡先を公開してもOKであれば名簿に載せてみる⇒それを見て見学してもよいか直接問い合わせをしてもらう（サロン間のやり取りの促進につながる⇒実際に見学したいという声はあるが、E社協でつなぐのは負担） 	<ul style="list-style-type: none"> ・地域包括が地域内に4ヶ所（生活支援コーディネーターが各1人配置）⇒この4圏域ごとに交流会をやるよということ、新・交流会に（年度によって異なるが、各圏域で年1～2回実施） ・当初は課題の抽出が念頭にあり、出席者に気になっていることを出してもらい、次の年の課題に設定し、話し合ってもらっていた⇒そのため、出席者にアンケートをとって、その結果を次年度の取り組みに反映⇒半年後、1年後になると、直近の課題ではなくなるので、関心が薄れる ・様々な課題が出てきたが、自分たちで解決できるような方法が見いだせない（行政に依存するしかないなど）⇒ここ1～2年は、サロンに持ち帰れるような内容にシフト（新しいレクリエーションの紹介、出前講座の紹介、グループワーク（活動歴の長いサロンから秘訣を披露してもらうなど） ・2024年度は、4圏域で各1回+地域全体での交流会（12月9日）を予定 ・旧・交流会では事例発表をしていたが、新・交流会ではやっていない（グループワークの中で活動の紹介はしているが） ・参加者を集めるためのチラシづくりをテーマとしたときは議論がスムーズに進んだりもした ・F社協職員が主導するのではなく、参加者同士で話し合ってもらうようにしている ・グループワークのグループ分けはくじ引きの場合もあるが、意図的に分けている方が多い（グループワークが苦手な人がいれば、同じサロンで固めるとか）
効果	<ul style="list-style-type: none"> ・他のサロンのことを知りたいという声が出た（特に会計処理の問題（人数が増えた時にどう処理するのか、剰余金が出たのに助成金をもらってよいのかなど）） ・他の地区は町内会がしっかりしており、地域活動の基盤ができていいるが、L地区は町内会活動が活発ではないこともあり、共同推進組織を立ち上げる必要があった⇒サロンが地域活動の基盤になっているのではないかと 	<ul style="list-style-type: none"> ・4圏域に分けてから、人間関係や仲がいいとかがわかりやすくなった ・グループワークは、新しく立ち上がったサロンと既存のサロンのつながりができる場になっており、疑問解消の場にもなっている ・新・交流会は、F社協の職員を知ってもらう機会であり、地域包括の職員や行政の職員を知ってもらう機会でもある⇒代表者やスタッフと話しやすくなった ・新・交流会は、新団体のサロンの交流としてはよい機会、運営のノウハウが身につくし、プログラムの共有も可能 ・新・交流会のグループワークで同じグループになった人同士で連絡先を交換していることがある⇒それをきっかけとして見学に行ったりすることはあるのではないかと ・新・交流会の出席者は代表者+スタッフ若干名だが、メンバーの固定化がみられる⇒逆に同じメンバーで毎年顔を合わせるというところでもある⇒出席者間のつながり（知り合い）ができているともいえるのでは
問題点・課題	<ul style="list-style-type: none"> ・「集まったはいけど、何をやるの？」という声もあった ・介護予防目的のサロンとそうでないサロンの間に温度差があるようだ ・積極的にサロン活動をしている人は他の肩書もある（E社協登録ボランティア、町内会役員など）⇒そういう人に負担が集中しがち、負担感を持っている様子⇒そうした負担の軽減を考えていく必要 ・E社協としてはサロンからの意見を吸い上げて課題を抽出していきたい ・積極的な活動をしているサロンに事例発表などをしてもらうことも考えたい ・サロンのリーダー育成のためには、サロン活動の効果を把握し、それを（リーダーに）どう伝えていくかが求められるが、効果を評価するための評価軸がないのが現状 ・むりやりサロンを作れとはいえない（そもそもサロンは自発的に立ち上げてもらうのが基本）⇒社協としての目標額（新規設立数など）の設定も難しい 	<ul style="list-style-type: none"> ・介護予防体操をやっているサロンが出席者の大半⇒活動内容（目的）で分けると、介護予防体操の話題ばかりになりかねない ・趣味のサロン（介護予防体操以外）が地域全体で10団体あるかないか⇒グループワークの際に趣味のサロンで固めることができない ・4圏域それぞれの交流会の間にも温度差があり、中には40分ずつとしゃべっているだけのところもある ・「同じことをやるの？」という声もある⇒新・交流会のマンネリ化 ・会場への距離があるので移動が難しい、町内会館でやるサロンだと町内以外はダメというところも⇒合同サロンは難いのではないかと ・スタッフが少なく困っているというサロンはあるが、他のサロンに声をかけるより、F社協、地域包括、行政に相談が持ちかけられる ・中には「交流することに意味があるのか」という代表者もいる⇒自分のサロンは自分で（運営を）決めたいということ ・新・交流会の最終目標の設定や、評価が難しい ・後継者不足については新・交流会で取り上げたことがある⇒ボランティアを増やしていくことが必要であり、そのためにどう周知すべきか、どう声掛けするかという議論にはなったが、そこでおしまい ・出席者同士は、公共施設や町内会のイベントなどですでに知り合いになっている（つながっている）ことが多い ・代表者はサロン以外の活動もやっている（老人クラブなど）⇒そこでつながっていたりもする ・介護予防体操の指導者の交流会もある（行政主催）⇒そこでスタッフ間がつながっていたりする

出所：各社会福祉協議会へのインタビュー調査結果に基づき筆者作成。

ふれあいサロン間の連携の促進に向けた取り組みの現状と課題(菅原)

表 1-4 交流会の現状と課題(4)

	G社協	H社協
背景・経緯	<ul style="list-style-type: none"> ・サロンの支援者(以下、支援者)向けの交流会として2014年度より開催 ・支援者は参加者の様子をチェックし、参加者とコミュニケーションをとるのがメインの役割 ・サロンの主要なスタッフはどうしても運営を重視しがち⇒支援者は主として参加者対応を重視 ・支援者はあくまでスタッフの一員、スタッフの中に支援者がいる ・サロンの参加者10名未満の場合、支援者2名を配置、10名以上の場合は3名を配置するようG社協では要請しているが、実際は人数不足で1名しか配置されていないこともある ・2015年度まで支援者養成のために研修会を開催(傾聴の知識など)、研修会の受講を経て支援者として登録 ・支援者は民生委員や町内会役員を兼ねていることが多い ・サロンの数は減少している(体調、高齢などによりやめるサロンが増加) 	<ul style="list-style-type: none"> ・2019年に生活支援体制整備事業としてサロンが3ヶ所でスタート⇒コロナ禍で会場が使えない、食事が出せないなどとなり、2020～2021年は休止⇒2022年より再開、現在は16ヶ所 ・交流会は年1回、M地区とN地区でそれぞれ開催(M地区は4月、N地区は8月)⇒M地区とN地区はサロンの特徴が異なる、距離が離れていることなどから別々に開催 ・N地区は連合自治会がしっかりしており、連合自治会単位でサロンが運営されているところが多い ・M地区は住民有志が集まって運営しているところが多いが、町内会や老人クラブ、福祉事業所(事業所が休みの日曜日に認知症カフェ)が運営しているケースも ・N地区は以前から交流会が行われていたようだが、M地区は2024年度にはじめて開催 ・まだサロン間のつながりがないので、H社協がサロン同士(サロンをやりたいという人も含めて)をつないでいこうとしている(システムのものではないが) ・サロンの代表者が他のサロンにも参加したり、新聞に掲載されたサロンを見学したりというケースは多い⇒H社協経由でつなぐこと(連絡先を公開していないので、H社協に聞けばわかるのではということか)が多い ・N地区で新しくはじめたサロンは、サロンを立ち上げたいということでH社協に相談があり、M地区のサロンに見学に行き(H社協の職員同行)、そこでアドバイス(どんなプログラムをやったらいいかなど)をいろいろもらって、サロンを立ち上げることができた⇒その後も、折り紙の講師で行ったりするなどのやりとりがあるようだ ・ネタがない、次回何をやらたいか、と言いつつ前にやったことはやりたくないというサロンから相談を受け、H社協が他のサロンにつないで、そこから教えてもらったことがある ・H社協がつないで、食事のサロンに見学に行き、この料理はどうやって作るのかと聞きレシピを教えてもらったことも ・どうやってサロンを立ち上げたらよいかわからないが、サロンでいろいろやりたいたいことがあるという相談もH社協で受けたことがある⇒H社協がM地区のいろいろなことをやっているサロンを紹介し、見学に連れて行ったことがある⇒そこで直接聞いたり、後からH社協を通じて聞いたりしながら、立ち上げをすることができた
サロンの状況		
内容	<ul style="list-style-type: none"> ・交流会は当初3～4回実施していたが、コロナ禍以降は年1回に減少 ・それぞれのサロンの状況を知る機会として、グループワークや事例発表(ゲームや体験の紹介を行っていた、コロナ禍のときは活動事例を情報誌として発行)を実施 ・コロナ禍明けは出席者が減少、コロナ前は100名前後⇒コロナ明けは50名程度 ・当初はその時々に応じた(旬の)テーマの講話⇒その後、グループワーク(2015年度～)やゲームや体験の紹介(2017年度)、足湯体験(2019年度)なども実施⇒コロナ明けは講話(2022年度)、グループワーク(2023年度) ・他のサロンの内容を自分のサロンに持ち帰ってもらおうというねらいで交流会をやったこともある(2017年度のゲームや体験の紹介など) ・グループワークでのグループ分けは、運営主体、活動内容など ・グループワークでの話題としては、何をしたらよいか(プログラム)、来てほしい人が来てくれないうこと(G社協は人数ではないとしているが、サロン側は人数で測るところもある) ・交流会ではじめて顔を合わせる出席者がほとんど⇒交流会の出席者は主として現場のスタッフ、代表者も出席OKだが出席する人は少ない ・例えば、町内会のサロンであれば、代表者が町内会長、担当者が福祉部長、支援者が福祉部員であることが多い⇒交流会に町内会長が出席することは少なく、福祉部長をはじめとして福祉部が何人かで出席するという感じ⇒要するに、サロン運営の中心的な存在の人たちが出席してくる⇒そのため、グループワークのグループ分けでは同じサロンの出席者は別々のグループに分けることを明示している ・サロンの代表者を集めた会議はない、交流会に包含されている形 	<ul style="list-style-type: none"> ・M地区の交流会の出席者は18名(8団体13名、行政、地域包括)、代表者が中心となって運営している所が多いので、出席者も代表者とそのサポート役というパターンが多かった ・自己紹介、活動紹介の後、悩み相談・質問タイムとしてグループワークが行われた(N地区も内容はおおむね同じ) ・N地区の交流会は人数が少ないのでそれぞれの状況を話さずだけで共有せずに終了⇒ただ、交流会は刺激にはなっていないようで、サロンをやらなければいけないと思っているようだ ・交流会には代表者だけでなく、みんなで来て欲しいという呼びかけはしている ・スタッフ向けの交流会をやったこともあるが、他のサロンと自分のサロンを比べるところでおしまいになった⇒交流会がスタッフの交流の場になれば
効果	<ul style="list-style-type: none"> ・サロンは閉鎖的になりがちで、サロンの中ではなかなか悩みを話さないが、交流会では同じような悩みを持つ人が多く、話し合える、という声も ・実際にゲームをやってもらい、出席者にも体験してもらった(2017年度)⇒一生懸命やってもらったこともあり、その場(交流会)で理解しているようだ ・長く活動しているサロンと新しいサロンを同じグループに分けてマッチングすることも⇒新しいサロンに長く活動しているサロンから情報収集してほしいという意味で、つないであげたいというねらい 	<ul style="list-style-type: none"> ・「はじめまして」の人も結構いた、知り合いばかりではないようだ⇒交流会の場で知り合いになる ・出席者はみんな話したい、相談したいと思ってきているので、グループワークは盛り上がる ・新しいサロンにとっては同じ規模のサロンにどうしているか聞けるのもメリット ・今のところ、相談とか見学とか出席者同士が直接つながっているわけではない⇒今後、交流会を継続していけば、こうしたつながりができてくるのではないかと期待している ・大きいところは食事を提供しているが、小さいところはみんなで作る、大きいところは人間関係(好き嫌い、クレーム)に苦慮しているが、小さいところではそうした問題がない⇒大きいところ同士と小さいところ同士で悩みが共通⇒規模で分けたのは正解
問題点・課題	<ul style="list-style-type: none"> ・グループをランダムに分けた時に、話の内容が自分のサロンでは役に立たないというクレームが出た ・実際ゲームをしても、後日、G社協に相談(あれはどうしたらできるのかな)があったり、フォローをしろという話はない ・交流会の出席者は、交流会だけのつながりは求めているが、それ以上のつながりは求めているようにない ・交流会をきっかけとしてサロン間のつながりができているかどうかは把握していない ・出席者の持つ悩みを共有して交流会の企画に反映させられるかどうか ・交流会のような機会が必要だが、開催する意図がないならやる意味はない(やるのが目的になってはいけない) ・企画のマンネリ化を招いたことがある⇒その時々々の社会情勢をよく見ながら内容を考える必要 ・サロンの参加者の数は減少しているが、やめるという話は出ず、どうしたら参加者を増やせるのか考えようという前向きなサロンが多いようだ ・町内会が運営するサロンが全体の6割⇒町内会の会員限定にしているところが多い⇒その他のサロンも含めて、他のサロンにも参加者が参加するということはなさそう ・サロンの日常的な参加者としてではなく、視察・見学や一般公開など1回ばっきのものであれば、受け入れてくれるサロンはありそう⇒自分たちのサロンが認められているという認識があるのでは、悩みを共有してもらいたいという意向もあるのでは 	<ul style="list-style-type: none"> ・N地区ではサロンのスタッフが不足するなど、代表者同士で連絡を取り合い、みんなで手伝いに行くというケースがあるが、M地区ではそうしたケースはない ・M地区とN地区で合同の交流会をやるのは難しいと思う ・開催日時がばらけていて、どのサロンも開催していないという日がほぼない⇒日程調整が難しい(今回は、1ヶ所重複してしまった) ・今回は規模の大・小で6人、7人に分けたが、もう少し細かくしてもよかったのでは ・食事を出しているサロンでは食事の数に限りがあったり、自治会費から費用を出してもらっているサロンでは自治会会員限定としていたりなど、よそからの定期的な参加には制限があるようだ⇒定期的な参加はともかく、見学くらいなら受けてくれるようなサロンはあると思う

出所：各社会福祉協議会へのインタビュー調査結果に基づき筆者作成。

上、F社協)、「交流会の場で知り合いになる」(H社協)など)。

- (3)悩みの共有(例えば、「同じような悩みを持つ人が多く、話し合える」(G社協)、「みんな話したい、相談したいと思ってきているので、グループワークは盛り上がる」(H社協)など)。
- (4)課題解決の場(例えば、「課題に対してどうやっているのか聞いてよかった」(B社協)、「情報交換で出された課題に対して、『うちのサロンではこうしている』という話題提供もなされた」(D社協)、「他のサロンのことを知りたいという声が出た(特に会計処理の問題)」(E社協)、「疑問解消の場にもなっている」(F社協)、「新しいサロンにとっては同じ規模のサロンにどうしているのか聞ける」(H社協)など)。
- (5)ふれあいサロン間のつながり(例えば、「新しく立ち上がったサロンと既存のサロンのつながりができる場」(F社協)、「長く活動しているサロンと新しいサロンを同じグループに分けてマッチングすることも⇒新しいサロンに長く活動しているサロンから情報収集してほしいという意味で、つないであげたい」(G社協)など)。

3.4. 問題点・課題

交流会における問題点・課題としては、以下の3点があげられる。

- (1)交流会の内容や運営に問題がある(例えば、「出席者の反応としては『あそこでああいうことをやっているんだね』という認識にとどまっている印象」(A社協)、「活動紹介で終わった(話しすぎて)グループも」(B社協)、「1人でしゃべる人がいたせいで、『他のサロンのことがもっと聞きたかった』という声が出た」(D社協)、「4圏域の交流会の間にも温度差が

あり、中には40分ずっとしゃべっているだけのところもある」「後継者不足については新・交流会で取り上げたことがある⇒ボランティアを増やしていくことが必要であり、そのためにどう周知すべきか、どう声掛けするかという議論になったが、そこでおしまい」(以上、F社協)、「グループをランダムに分けた時に、話の内容が自分のサロンでは役に立たないというクレームが出た」「企画のマンネリ化を招いたことがある」(以上、G社協)など)。

- (2)社会福祉協議会が交流会の効果を把握していない(例えば、「茶話会のサロンと体操のサロンが交流会で同じグループになり、茶話会のサロンから体操のサロンの話を聞いて講師に来てもらえないかという話になったようである」⇒「その後は不明」(以上、B社協)、「各サロンでやっているゲームの種類をホワイトボードに書き出し、共有を図った⇒『やったことない』『どういうルール?』などと聞き出すケースが目立った」⇒「共有を、実際にしているかどうかは不明」(以上、D社協)、「交流会をきっかけとしてサロン間のつながりができているかどうかは把握していない」(G社協)など)。
- (3)交流会の目的が明確でない(例えば、「『集まったはいいけど、何をするの?』という声もあった」「(サロン活動の)効果を評価するための評価軸がない」(以上、E社協)、「『同じことをやるの?』という声もある」「中には『交流することの意味があるのか』という代表者もいる」「最終目標の設定や、評価が難しい」(以上、F社協)など)。

4. 考 察

前述のように、交流会は、相応の効果を生

み出しているもの、一方で様々な問題点・課題を抱えており、必ずしも適切に運営されているとはいえないことが明らかとなった。その背景としては、以下の2点が考えられる。

(1)ふれあいサロン間の連携を図っていく上での障害が存在している

①町内会が運営するふれあいサロン（例えば、「町内会主催のサロンは、参加者を町内に限定しているの、参加者の広がりが見られないし、サロン間の連携という話にはなりにくい」(B社協)、「町内会のサロンは町内会限定なので、(それ以外の人に参加することは)難しい」(C社協)、「町内会館でやるサロンだと町内以外はダメというところも」(F社協)、「町内会が運営するサロンが全体の6割⇒町内会の会員限定にしているところがほとんど」(G社協)など)。

②ふれあいサロン間の距離（例えば、「サロン間の距離が離れていることもあり、近隣のサロンからサポートするという話にはならない」(D社協)、「会場への距離があるので移動が難しい」(F社協)など)。

③ふれあいサロンの個性（例えば、「サロンだとそれぞれのカラーがあるので、横のつながりはつくりにくいのではないか」(C社協)、「各サロンにそれぞれ『色』がある⇒合併してまでサロンを継続するということはない」(D社協)など)。

(2)ふれあいサロン間の連携の動機付けがない

①そもそも連携を必要としていない（例えば、「他のサロンと交流したい、他のサロンはどうしているのか知りたい、他のサロンを見に行きたいというようなニーズがサロン側にはあまりないの

ではないか」「もともと仲良しでサロンを始めたところ、つながりのある人同士でサロンを始めたところが多いこともあり、サロン間のつながりを求めているわけではないという面もある」(以上、A社協)、「慣れたメンバーだけでよいというサロンもあるので、サロン間の連携というニーズはサロン側にはない」「高齢化に伴う体力的な負担などから、今後サロン間の交流をしようとは思わないのではないか」(以上、B社協)、「年1回情報交換の場(交流会)があり、そこで他のサロンの情報が得られるので、それで十分だし、社協職員がサロンに訪問したときに『他はどうしている?』と聞き『こうしている』と教えてもらえればそれで十分に満たされているのでは」(以上、D社協)、「交流会の出席者は、交流会だけのつながりは求めているが、それ以上のつながりは求めているようだ」(G社協)など)。

②すでに人的なネットワークが構築されている（例えば、「リーダーは民生委員や町内会役員などを兼務していることが多く、そこで知り合いになる」(A社協)、「出席者はもともと知り合いであるケースが多いことから、サロン間の交流には発展しなかった」(B社協)、「積極的にサロン活動をしている人は他の肩書もある」(E社協)、「代表者はサロン以外の活動もやっている(老人クラブなど)⇒そこでつながっていたりもする」「出席者同士は、公共施設や町内会のイベントなどですでに知り合いになっている(つながっている)ことが多い」「介護予防体操の指導者の交流会もある(行政主催)⇒そこでスタッフ間がつながっていたりする」(以上、F社協)など)。

③現状維持で十分というスタンス（例えば、「自分たちのサロンを維持していただくだけで精一杯」（B社協）、「現在のサロン活動を続けていければ満足」「特に変えようとかは思っていない、続けていければそれでOK、サロンを続けていくことができているから、それで十分」（以上、D社協）など）。

その一方で、(1)一部であっても継続的な運営を図ろうとするふれあいサロンが存在し（例えば、「サロンの中には代表を交代（若い世代に）したところもある⇒危機感がないわけではなく、存続していきたいという意欲はあるのでは」（D社協）、「サロンの参加者の数は減少しているが、やめるという話はず、どうしたら参加者を増やせるのか考えようという前向きなサロンが多いようだ」（G社協）など）、(2)それらのふれあいサロンのうち、ある程度がふれあいサロン間の連携のメリットや必要性を認識しており（例えば、「サロン間での協力がみられる（助成金申請の書類の書き方のアドバイス、他のサロンの活動内容の情報提供（クチコミ）など）」（C社協）、「複数のサロンに関与している人がいる⇒サロンの新規立ち上げに協力」（E社協）、「他のサロンのプログラムを見学して、自分たちのサロンでもやってみるということもある」（F社協）など）、(3)地域においてふれあいサロン間の連携の素地がある（例えば、「クチコミで他のサロンを知り、参加するケースがあり、サロンの掛け持ちが多い印象」（B社協）、「参加者が他のサロンにも参加することはあるのではないか」（C社協）、「おそらくサロン間でのやりとりは以前からあったのではないか」（E社協）、「複数のサロンを掛け持ちする人がけっこういる」「必要に応じて社協がサロン同士をつなげることも」（以上、F社協）、「サロンの代表者が他のサロンにも参加したり、新聞に掲載されたサロンを見学したりというケー

スは多い」「N地区で新しくはじめたサロンは、サロンを立ち上げたいということで社協に相談があり、M地区のサロンに見学に行き、そこでアドバイスをいろいろもらって、サロンを立ち上げることができた⇒その後も、折り紙の講師で行ったりするなどのやりとりがあるようだ」（以上、H社協）など）のであれば、そうした一部のふれあいサロン間であっても、連携の促進を図っていくことを考える必要がある。

前述したふれあいサロン間の連携を図っていく上での障害の存在や、ふれあいサロン間の連携の動機付けがないことについては、簡単に解決できるものではない。そのため、これらを前提とした交流会のあり方を考えていく必要がある。そこで、今後、一部のふれあいサロン間であっても、連携の促進を図っていくのであれば、それに向けた取り組みの1つである交流会の運営を再検討することが必要である。

ただ、会うだけ、知り合いになるというだけであれば年1回でも十分かもしれないが、ふれあいサロンが直面する課題は常に変化しており、それらを共有し、解決を図っていくのであれば、年1回の開催では不十分である。少なくとも年に複数回の交流会を、毎回具体的なテーマを設定して開催することが必要である。そのことによって、交流会の目的が明確化されていくことにもつながるはずである。あるいは、交流（および情報提供）目的に限定した交流会と、課題の共有と解決を目的としたワークショップを、それぞれ別個に開催することも考えられる。後者のワークショップについては、具体的な課題を設定し、その解決策に至るまでの議論を行い、課題解決に必要なノウハウの共有までつながるような内容とする必要がある。

そして、交流会（ワークショップ）開催後、参加したふれあいサロンが課題の解決にどの程度取り組んでいるかを確認する（すなわち、

交流会(ワークショップ)の効果を把握する必要がある。そのためには、社会福祉協議会によるアフターフォロー(定期的なふれあいサロンへの訪問による)が必要である。その中で、交流会(ワークショップ)の効果の把握はもちろんのこと、新たな課題(問題意識、困りごと)の把握を行うことにより、次回の交流会(ワークショップ)のテーマ設定に活かしていくことが必要である。

ただし、交流会の運営の具体的な再検討を行うに際しては、市区町村レベルの社会福祉協議会における経営資源(主として、人材や資金)が必ずしも十分ではないことなどを考慮する必要がある。

5. おわりに

5.1. まとめ

本稿では、ふれあいサロン間の連携の促進に向けた取り組みの現状と課題を明らかにすることを目的とし、そのうち交流会に着目し、北海道内の8ヶ所の市区町村社会福祉協議会で開催されている交流会の背景・経緯、内容、効果、問題点・課題の抽出と整理を試みた。

その結果、交流会における効果として、(1)プログラムの共有、(2)出席者同士が知り合いになる機会、(3)悩みの共有、(4)課題解決の場、(5)ふれあいサロン間のつながりという5点があげられる一方、交流会における問題点・課題として、(1)交流会の内容や運営に問題がある、(2)社会福祉協議会が交流会の効果を把握していない、(3)交流会の目的が明確でないという3点があげられ、交流会は必ずしも適切に運営されているとはいえないことが明らかとなった。その背景としては、(1)ふれあいサロン間の連携を図っていく上での障害が存在している、(2)ふれあいサロン間の連携の動機付けがないという2点が考えられる。

その一方で、(1)一部であっても継続的な運営を図ろうとするふれあいサロンが存在し、

(2)それらのふれあいサロンのうち、ある程度がふれあいサロン間の連携のメリットや必要性を認識しており、(3)地域においてふれあいサロン間の連携の素地があるのであれば、そうした一部のふれあいサロン間であっても、連携の促進を図っていくことを考える必要がある。

前述したふれあいサロン間の連携を図っていく上での障害の存在や、ふれあいサロン間の連携の動機付けがないことについては、簡単に解決できるものではなく、これらを前提とした交流会のあり方を考えていく必要がある。

そこで、今後、一部のふれあいサロン間であっても、連携の促進を図っていくのであれば、それに向けた取り組みの1つである交流会の運営を再検討することが必要である。

具体的には、(1)少なくとも年に複数回の交流会を、毎回具体的なテーマを設定して開催するか、あるいは、交流(および情報提供)目的に限定した交流会と、課題の共有と解決を目的としたワークショップを、それぞれ別個に開催する、(2)交流会(ワークショップ)開催後、参加したふれあいサロンが課題の解決にどの程度取り組んでいるかを確認する(すなわち、交流会(ワークショップ)の効果を把握する)ことが必要である。

5.2. 今後の研究課題

本稿での分析対象は、北海道内の8ヶ所の市区町村社会福祉協議会における交流会のみであり、限定されたものとなっている。そして、問題点・課題における背景の中には、北海道独自の事情と考えられるもの(例えば、サロン間の距離など)もみられる。そのため、北海道内の他の社会福祉協議会はもちろん、北海道外の社会福祉協議会における同様の取り組みについても分析対象としていくことが求められる。

謝 辞

本稿の作成に際しては、北海道内8ヶ所の市区町村社会福祉協議会の皆様にインタビュー調査や資料提供などのご協力をいただいた。また、(福)北海道社会福祉協議会および(福)札幌市社会福祉協議会には、これら8ヶ所の市区町村社会福祉協議会のご紹介をいただいた。なお、本稿は、2024年度北海学園学術研究助成による成果の一部である。関係各位に深く感謝する次第である。

注

- 1) 以下、サロンと略記することがある。
- 2) 「多くのふれあいサロンに共通する課題を総括すれば、その課題は『活動プログラムの作成』『運営スタッフの確保』『参加者の確保や拡充』の大きく3つに集約できる」(森(2008), p.89)という指摘がある。
- 3) なお、前述の中村(2019)では、複数サロンの利用者による情報共有がサロン同士のゆるやかなつながりのきっかけになったのであって、サロン代表者による連絡会がサロン同士のゆるやかなつながりをもたらしたのではない。したがって、連携の促進に向けた取り組みが行われたというわけではない。

参 考 文 献

- 松井順子(2014)「ふれあい・いきいきサロンの有効性と課題に関する考察—宝塚市の実践例から—」、『大阪千代田短期大学紀要』43: 82-93.
- 松浦健治郎・浦山益郎(2010)「地域福祉を支える『地域の居間』としてのシルバーサロンに関する研究 その1 三重県名張市におけるシルバーサロンの管理運営の実態」、『日本建築学会東海支部研究報告書』48: 525-528.
- 三宅康成・井関崇博(2014)「農村地域における『ふれあいサロン』の実態と課題」、『兵庫県立大学環境人間学部研究報告』16: 99-109.
- 森常人(2008)「高齢者を対象とした地域社会での人間関係の構築と生きがいの形成のための一考察—ふれあい・いきいきサロンと小地域交流サロンによる事例をもとに—」、『政策科学』16(1): 87-101.
- 中村久美(2019)「地域コミュニティとしての『ふれあい・いきいきサロン』の持続性と包括性に関する研究」、『日本家政学会誌』70(7): 403-415.
- 坂本一恵(2018)「地域福祉活動による『ふれあい・いきいきサロン』の効果」、『佐女短研究紀要』52(2): 27-39.
- 菅原浩信(2017)「ふれあいサロンのネットワーク化に関する考察」、『開発論集』99: 1-14.
- 高野知良・坂本俊彦・大倉福恵(2007)「高齢者の社会参加と住民意識—ふれあい・いきいきサロン活動に着目して—」、『山口県立大学大学院論集』8: 129-137.
- 山下理恵子・中村登志子・洲崎好香・松永里香・市場正良・有吉浩美(2012)「急激な高齢化が進むK町における高齢者ふれあいサロン事業の評価」、『日健医誌』21(2): 69-77.